

(様式1) 平成 22 年度

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2870501224		
法人名	社会福祉法人 光朔会		
事業所名	グループホーム オリンピア兵庫		
所在地	兵庫県神戸市兵庫区小松通5丁目1-14		
自己評価作成日	平成22年11月1日	評価結果市町村受理日	平成23年3月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 H.R.コーポレーション
所在地	兵庫県西宮市甲陽園本庄町6-8-102
訪問調査日	平成22年11月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「認知症になっても、誇りを持ってこれまでどおりの暮らしを安心して続けていただくお手伝い」を理念に掲げ、利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を大切に、パーソンセンタードケアを提供している。家庭的な環境の中で、利用者のこれまでの人生をよく知り、グループのもつ力を活用することにより、残された能力や可能性を最大限に引き出すケアを行っている。また、デイサービス、ショートステイを併設し、住み慣れた地域で継続的にケアを受けることができる、小規模多機能ホームであることも大きな特徴である。地域に開かれたコミュニティカフェ「Cafe Olympia」を併設し、地域住民とともに Salon de l'Olympia(コンサート・落語会等)や「オリンピア福祉塾講座」を開催するなど、地域との協働も多い。さらに、スウェーデンをはじめとする国内外からの見学・実習の受け入れや、大阪大学大学院などの研究機関と共同研究を実施するなど、認知症ケアの発展にも力を注いでいる。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

懐かしさが残る住宅街の一角にある、「高齢者総合福祉施設オリンピア兵庫」として開設された中のグループホームである。法人の理念である、「生活の主人公は利用者ご本人です」掲げ、利用者と共に地域社会と交流を持ちながら穏やかな生活の継続を実践している。日常的な交流はもとより地域の代表として利用者と共に祭りへの出店を行ったり、勉強会を事業所で開催し、地域住民を招いたり、コンサートやイベントを地域住民と共に開催し地域との活発な交流を継続している。年1回の家族懇親会や事業所で開催される行事には、家族すべて参加できるようにしており普段から意見や要望を言い易い関係を築き、意見や要望を伝えてもらえるようにしている。職員は、常に利用者の健康管理に留意し、利用者の希望にあわせた散歩・外出や、個別の旅行などにも一緒に出かけ「寄り添うケア」を心がけお互いの思いを共感しながら、利用者を中心に穏やかな生活が出来るように努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)		

自己評価および第三者評価結果

自己 者 第	三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者ひとりひとりの「その人らしい暮らし」を支えるオリμπピア兵庫の理念、そして理念の実践のための3つの約束を作成し、毎日の朝礼、カンファレンス、内部研修等を通じ、全スタッフで共有、実践をしている。	毎月のカンファレンスで理念に基いたケアが実践されているか確認を行っている。職員は理念と実践の為の3つの約束について振り返りの機会を持ち、日々、利用者との関わりの中で理念をケアに活かしている。毎年、全職員を対象に施設長が理念について研修を行い、全職員への理念の浸透を図ると共に研修報告レポートで職員一人一人への浸透の状況を確認している。	今後も継続的に会議やカンファレンスの中で振り返りの機会を持つことが望ましい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日々の外出、買い物等、「地域で暮らす」ことによる地域交流を図るとともに、祭りへの出店や勉強会の開催をしたり、地域住民と共同でSalon de l'Olympia(コンサート等のイベント)を開催するなど、日常的な交流を行っている。	買物や散歩など外出の機会には挨拶を交わすなど、日常的な交流はもとより地域の代表として利用者と共に祭りへの出店を行ったり、勉強会を事業所で開催し、地域住民を招いたり、Salon de l'Olympia(コンサート等のイベント)を地域住民と共に開催し地域との活発な交流を継続している。Salon de l'Olympia(コンサート等のイベント)では、一流のものに触れようと高齢者の尊厳を大切にイベントで交流を保っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「オリμπピア福祉塾講座」等の勉強会を開催したり、地域の認知症に関する相談に乗るなど、現場での経験を共有している。また、館長が神戸市認知症介護サービス研修の講師を務めたり、地域での講演活動も積極的に行っている。		

自己 者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3) ○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、写真やビデオ等を利用し各ユニットの日々の生活や行事の様子を紹介したり、質向上のための話し合いをしている。出された意見はユニットで共有し、サービス向上に取り組んでいる。入居者も数多く参加している。	利用者や家族、地域代表者、知見を有する方の参加で、情報交換や情報提供、意見交換など参加者とともに会議を作り上げ、会議で出された意見や要望を積極的に運営に反映させるように取り組んでいる。参加メンバーではない家族の方の参加もあり、運営推進会議への参加者が多くなっている。利用者にも運営推進会議の趣旨や意義を説明し理解を得ている。利用者の会議への出席を希望される方が多くなり、毎回出席者の自己紹介をされるが、普段の利用者の様子とは違い、お客様をお招きしもてなしをしている様子が伺えたり、会議の中で、メモを取ったり意見を述べたり利用者からイベント時の話が出るなど、積極的である。毎回月刊オリμπピアを出席者に配布している。	
5	(4) ○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市担当者とは日常的に情報交換を行い、協力関係を築いている。また、館長が市の研修で講師を務めたり、市担当者からの依頼で国内外からの見学・実習を受け入れたりもしている。	市の高齢福祉課とは日常的に情報交換を行い、市職員からの問い合わせもある。市の開催する会議や研修への参加はもとより市からの依頼で事業所から講師を派遣する等相互の協力体制を築いている。厚生労働省の見学の受け入れや海外の見学者の受け入れも行っている。最近では、高齢者福祉関係以外にも見学の依頼がある。	
6	(5) ○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止の理念をトップを含め全職員が共有するとともに、身体拘束廃止マニュアルの作成し、研修を実施している。また、玄関のドアは日中施錠せず自由に出入りができるほか、心理的なロックをかけないように取り組んでいる。	日々行う一つ一つのケアが身体拘束にならないのか考えながら実践している。館内を自由に移動される利用者の方もおられるが、事業所全体のユニットや部署の協力で利用者がその人らしく自由に過ごせるように支援している。言葉使いについては、高齢者の尊厳を大切に、敬う心を持ち、自然と敬語や丁寧語で接し、その人らしさを大切にした言葉かけや言葉使いを行っている。利用者と共に過す中で自分自身で自問自答しながらケアを実践し、身体拘束しない・虐待防止に取り組んでいる。研修も計画的に実施している。	

自己 者 第 三	項 目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6) ○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止に関する研修を定期的に実施し、虐待の定義や高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を設けている。また、日々のケアにおいても、虐待につながりそうな危険がないか、常に注意し、話し合う機会を設けている。	高齢者の虐待についても研修を継続的に実施し、虐待についての理解と知識を深めている。具体的な事例も含めて研修を実施し虐待が疑われる事例への対応についても検討されている。	
8	(7) ○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する制度の理解と活用について研修を行い、管理者や職員が知識を深める場を設けている。また、必要と思われる利用者については、関係機関への橋渡しを早急に行っている。	権利擁護に関する制度について、行政書士を招いて研修を行い制度の理解を深め、利用者の必要に応じて制度を円滑に利用できるように取り組んでいる。利用者の中にも制度を利用している方がおられる。利用者の方に必要性があれば、関係機関へ速やかに相談しスムーズに利用できるように支援している。	
9	(8) ○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結、解約、改定の際には、利用者や家族の立場に立って、十分に理解してもらえるように説明を行っている。また、疑問点に関しては速やかに解決できるよう、対応している。	契約は、館長・管理者が行っている。契約前には、管理者より契約書・重要事項説明書の内容について具体的な例も含めて時間をかけて説明し、契約書・重要事項説明書を1部手渡している。不明点や疑問がないか確認し十分理解した上で、契約に至っている。特に契約解除時については細かな説明を加え、利用者・家族の理解と協力が得られるように取り組んでいる。改定時も十分に説明を行い、理解してもらい同意を得るようにしている。	
10	(9) ○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年に1度ご家族懇談会を開催するほか、家族も含めた食事会等の行事を随時開催し、意見・要望を聞く機会を設けている。出された意見・要望は職員で共有し、速やかに運営に反映させるよう取り組んでいる。	年1回のご家族懇親会や事業所で開催される行事には、家族すべて参加できるようにしており意見や要望を伝える機会を多く持っている。普段から意見や要望を言い易い関係作りと雰囲気を作り、いつでも意見や要望を伝えてもらえるようにしている。家族面会時には、リーダーや担当職員から声かけを行い、普段の生活の状況(利用者が楽しかったこと)を話しする中で意見や要望を言い出し易い雰囲気作りを行っている。小まめに電話連絡も行い、利用者の普段の生活の様子を報告するだけでなく、受診の状況や身体状況についても報告を行っている。	

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	館長がリーダーおよび全スタッフ対象に定期的に面談を行っているほか、日常的に職員が意見や提案をしやすい関係性を築いている。また、法人全体として、職員の提案を積極的に採用する方針を定めている。	職員とは会議の中で意見や要望を聴取する機会を持つ他、館長がリーダーには月1回、全職員と年1回は個別に話を聞く機会を持ち、職員から意見や要望を聴取する機会を持っている。館長との年1回の面談では、自己評価シートを基に振り返りを行っている。ユニットの単位を大切に考え、それぞれのリーダーに権限を移乗しており、毎年各ユニットでリーダーを中心に話し合いを行い方針を立てて運営していく中で、各職員の意欲を引き出すと共に意見や要望などを聴取し、運営に反映できるように話し合っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員ひとりひとりが毎年目標を設定し、それに対する自己評価および上司による評価を実施することによって、向上心をもって働ける環境を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の事業目標として「質の高い人材の育成」をかかげ、職員ひとりひとりにいま必要とされる技能や知識を把握し、それぞれの段階に応じた研修やトレーニングの機会を積極的に提供している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内外の施設や同業者との交流を通じ、サービスの質を向上させるように取り組んでいる。また、他施設からの見学・実習の受け入れも積極的に行う他、パブリシティやシンポジウム等を通しての情報発信も積極的に行っている。		

自己 者 第 三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15	○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入段階においても、パーソン・センタード・ケアの理念に基づき、本人の立場に立って、困っていることや不安・要望に耳を傾けている。		
16	○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居までに、利用者本人や家族と面談をしたり、訪問してもらう機会をつくったりし、信頼関係を構築し、不安や疑問を取り去った上でサービスの導入を行うようにしている。		
17	○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族がいま置かれる状況を的確に把握し、その時に必要としていることを支援するようにしている。必要に応じて、法人内外の他のサービスや機関への橋渡しも行っている。		
18	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	パーソンセンタードケアの理念のもと、お互いが必要とし、支え合い、向上することができるような関係性の構築に努めている。スタッフは一方的にケアを行うのではなく、共に暮らしをつくることを大切にしている。		
19	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は、本人と家族の関係の深さを理解し、「家族にしかできないこと」を活かしながらケアを行うように努めている。常に家族と密に情報交換を行い、共にケアをつくりあげていくように取り組んでいる。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(11) ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者ひとりひとりのこれまでの人生をよく知り、馴染みの人との面会や、思い出の場所や馴染みの場所への訪問を支援するなど、これまで大切にしてきた関係性を途切れさせないように努めている。	利用者一人ひとりのこれまでの人生や生活、人間関係を十分理解することで馴染みの場所や人との関係継続ができるように支援している。日々利用者と係わる中で知りえた馴染みの場所への外出は、利用者の体調や希望を考えながら楽しめるように支援している。最近では同施設内にあるデイサービスやショートステイの利用者で施設の周辺地域の居住者の入居が多くなり、地域社会との関係継続の支援がし易い状態になっている。	
21	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者ひとりひとりの状況やその関係性を常に把握し、利用者同士が関わり合えるように、職員はグループ・ダイナミックスを利用しながら間に入り、支援をしている。		
22	○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	自宅に戻るため、あるいは長期入院のために退去した利用者とも必要に応じて連絡を取り、必要な支援を提供している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
23	(12) ○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者ひとりひとりのことをよく知ることで、思いや希望を常に把握し、それを日々のケアに活かすようにしている。困難なケースであっても、家族や友人等の協力を得ながら、利用者本人を中心として、実現に向けて取り組んでいる。	利用者の一人ひとりと日々関わる中で職員は、利用者の思いや意向、希望を利用者の立場に立って考え思いや意向を把握しようと努めている。	非言語コミュニケーションの中の、利用者の本意を汲み取りながら、利用者一人ひとりの思いや意向を把握する取り組みの継続を期待する。
24	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者本人や家族の協力によって、利用者ひとりひとりの個人史を把握しているほか、嗜好や生活環境についても、本人や家族から詳細な情報を得るように努めている。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者ひとりひとりの日々の状態、残されている力を、偏見や思い込みにとらわれないように、常に新たな視点で把握するように努めている。特に、変化した点については、小さなことであっても職員間で情報共有を行うように取り組んでいる。		
26	(13) ○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者本人や家族の希望やアイデア、そして職員日々の気づきを介護計画に積極的に反映させるように、チームでアプローチしている。また、定期的な見直し以外にも、日常の変化等に応じて随時計画を見直すようにしている。	介護計画は3ヶ月に1回定期的に見直しを行っている。センター方式を使用し利用者の状況等を把握しアセスメントしている。毎月ケアカンファレンスで利用者一人ひとりのサービスの実施状況の確認と月間の目標を立てて実践している。初期計画は入所後1週間程度は、利用者の行動や言葉などを細かに記載して把握するようにしている。入居前から把握できた情報と入居後把握できた情報でセンター方式を使用しアセスメントを行い作成している。	把握できた情報をアセスメントし課題やニーズに沿って立てられた介護計画を常に念頭においてケアを実践する必要があるため、課題やニーズに沿って立てられた介護計画を実践した結果を日々の介護記録の中に記載されることが望まれる。
27	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者ひとりひとりの日々の状況を適切に記録し、職員間で情報を共有した上でケアに活かしているほか、小さな気づき等についても記録し、申し送りを徹底し、ケアの実践や介護計画に反映させるようにしている。		
28	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	従来のサービスの枠にとらわれず、利用者ひとりひとりの状況やニーズに応じた、柔軟なサービス提供に取り組んでいる。また、オリμπア兵庫として、デイサービス・ショートステイとを組み合わせ、小規模多機能ケアに取り組んでいる。		
29	○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	オリμπア兵庫の存在する地域において、商店街や老人会等と協力し、地域資源を把握するとともに、利用者ひとりひとりの地域生活の支援のために、地域のもつ力を活用している。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関または希望する医療機関のかかりつけ医を選定し、受診できるように支援している。また、かかりつけ医は定期的に往診をし、利用者の健康状態を把握するとともに、本人・家族が希望を伝えやすい環境づくりをしている。	利用者・家族の希望する馴染みのかかりつけ医又は協力医療機関か選択し受診又は往診を受けることができるように支援している。毎日バイタルサインチェックを行い健康状態を把握する他、同施設内にあるショートステイやデイサービスにいる看護師にいつでも相談できる体制が整えられ、相互に良好な関係作りが出来ている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、日常的にオリンピック兵庫の看護師と緊密な情報交換を行っている。体調が悪化したときや急変時等は、必要に応じて看護師が対応したり、相談に乗ったりしている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院した際には、オリンピック兵庫と病院の医師、看護師、地域連携室、家族等が情報交換を行い、早期に退院できるように支援している。また、日頃から協力医療機関と情報交換を行ったり、利用者の入院時にはスタッフや利用者が見舞いに訪れたりしている。	協力医療機関へ救急搬送する場合は職員が同行し、利用者の状況説明を行いあらかじめ利用者一人ひとりの翔主要な情報をリストアップし情報提供している。緊急時は情報提供は口頭で行うが、時間があればサマリーを作成し身体状況のみでなく、日常生活の状況なども情報提供できるようにしている。入院は利用者にとって住みなれた環境と違い変化が心身へ大きな影響を及ぼすため、入院中は家族と共に利用者に関わりを持ちながら、医療機関と連携をとり病状把握を行い情報交換することで早期に退院できるように支援している。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の対応に関して、入居時に方針を確認するとともに、その後も状態の変化に応じて随時、本人・家族と館長・管理者・スタッフ等が話し合う場を設けている。終末期にはかかりつけ医等の関係者とともにチームで積極的にターミナルケアに取り組んでいる。	契約時より重度化終末期の対応について説明を行っている。重度化・終末期についての受け入れは、医療依存度が高くなければ、可能な限り受け入れを行う方針で対応している。重度化終末期の身体状況の変化に応じて医師・家族と共に話し合いを重ね、統一した方針で看取りを行うようにしている。現在までに看取りを行っているが、利用者への影響は認められない。	利用者本人の苦痛を取り除き対応していくことはもとより、職員への影響も考え話し合いや研修を重ねていく取り組みが望ましい。

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフが緊急事態に対応できるように、市民救命士講習等外部研修に参加したり、内部研修を定期的開催したりしている。また、利用者への個々の対応に関しては、普段よりユニットで想定される事態をシミュレーションしている。		
35 (17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	非常災害時への対応についてスタッフが定期的に研修を受講するほか、年に2回、昼間想定・夜間想定消防避難訓練を実施している。また、地域の消防署・交番等とも日常的に情報交換を行い、緊急時への備えを行っている。	事業所内研修の介護サービス従事者研修の中で地震・火事・風水害・竜巻・雷について細かく非常災害時の対応の研修を行っている。研修では、各フロアでも避難場所の確認や普段の生活の中でも危険な箇所の気づきを促し対応方法を検討している。全館スプリンクラーの設置がなされており、ベランダへの避難誘導をするようになっている。備蓄も施設全体で準備している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援				
36 (18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「オリμπピア兵庫3つの約束」のひとつとして、スタッフは利用者に敬語で話をすることを徹底している。また、日々の生活の中でも、「誇りを持ったこれまで通りの生活を送るお手伝い」の理念の実践に努めている。	理念を元にした3つの約束でケアをより具体的に実践し易いようにして、浸透が図られ、利用者の尊厳や一人ひとりの人格の尊重を行うケアを行い誇りやプライバシーを損ねない言葉や態度を事業所全体で行うように取り組んでいる。	
37	○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の自己決定を引き出す声かけを行い、ひとりひとりの思いや希望を引き出すよう努力している。また、その思いや希望は、たとえ困難なことであっても、実現できるようにチャレンジしている。		
38	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「生活の主人公は利用者本人である」という理念のもと、利用者ひとりひとりの生活のリズムやペースを大切にした支援を行っている。職員は、利用者の日々の希望を引き出すよう、取り組んでいる。		

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39	○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者ひとりひとりの「その人らしさ」を引き出す服装や身だしなみができるように支援している。また、利用者ご本人が服を買いに行く機会を設けたり、玄関に鏡を置くなど、日々の生活の中におしゃれを取り入れる支援をしている。		
40	(19) ○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	「食事は人の心が最も開く時間」と捉え、利用者もスタッフもゆったりと食事の時間をたのしむことができるようにしている。準備や後片付けについても、ひとりひとりの持てる能力を引き出し、積極的に参加してもらうようにしている。	食材の搬入は業者から受けているが、調理・盛り付け・配膳・後片付け等の一連の流れを利用者と共に自然な形で行なっている。準備・後片付けは利用者一人ひとりの身体状況や希望に合わせて利用者が自然に参加しやすい場面で手伝い過ぎないように職員は支援している。美味しいものを楽しく食べることができるよう口腔内の状況を良好に保てるように支援し、必要であれば歯科受診を勧め食への楽しみが継続できるようにしている。	
41	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事のメニューは館長やオリンピア兵庫の栄養士が常にチェックを行い、栄養面だけでなく季節の旬の食材を使うことや、彩りにも細心の注意を払っている。また、スタッフが一緒に食事をし、ひとりひとりの摂取量を把握している。		
42	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ひとりひとりの口腔内の状態や、能力に応じた口腔ケアを実施している。また、協力医療機関の歯科医院からも定期的に検診に来てもらい、専門的な立場からのアドバイスをもらってケアに活かしている。		
43	(20) ○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ひとりひとりの排泄の状況、能力を把握し、可能な限り自立して排泄できるような支援を行っている。また、おむつメーカーと協働し、専門的な立場からのアドバイスをもらうことによって、ひとりひとりの排泄環境の向上にも日々努めている。	利用者の排泄の状況を把握し、一人ひとりにあった声かけや誘導、パット交換を支援している。18名中7名程度が排泄は自立しており、他は、声かけ・誘導のみで排泄が可能である。声かけもパターンのみで声かけを行うだけでなく利用者の行動や表情から読み取り声かけを行い誘導を行うことも実施している。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44	○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	オリンピア兵庫の看護師・栄養士の協力を得て、食事のメニューの工夫や適切な水分補給を行うことにより、便秘を予防する取り組みを行っている。また、利用者ひとりひとりの能力に応じ、積極的に運動してもらえるよう、支援している。		
45	(21) ○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員の都合ではなく、朝・昼・夜を問わず、利用者の希望するタイミングで、満足できるように入浴してもらえるよう支援をしている。あまり入浴を好まない利用者についても、声かけや工夫によって、期間が空きすぎないように取り組んでいる。	利用者の希望や体調に合わせていつでも入浴できるように支援している。入浴を嫌がる傾向にある方へは、声かけを工夫するなどして気持ちよく入浴できるように支援している。	
46	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	定時就寝・定時起床ではなく、利用者ひとりひとりの生活のリズムやその日の状況に応じて、安心して寝てもらえるようにしている。必要であれば、食事の時間を調整するなど、安眠のための支援を行っている。		
47	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員ひとりひとりが確実に薬の目的や用法を理解し、適切な服薬の援助ができるように、日々情報の共有を行っている。特に、新しい薬が処方されたり、薬が変更された場合、確実に申し送りを行い、誤薬等の事故の防止に努めている。		
48	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者ひとりひとりが責任や役割をもって日々の生活を送ることができるように、ひとりひとりの個人史等も活用しながら、支援を行っている。また、常に新しいことにチャレンジし、毎日たのしみがあるようなケアを心がけている。		

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者ひとりひとりの希望や気分に応じて、気軽に外出できるように支援を行っている。普段行けないような場所でも、家族との協力のもと、ハワイ旅行・淡路島旅行・六甲山旅行等、これまでも本人の希望を数多く実現させている。	個別や小グループでの外出の機会を確保している。パーソンセンタードケアの考えに沿って利用者一人ひとりと関わる中で馴染みの場所や行きたい場所、会いたい人などを把握し実現できるように個別や少人数での外出で支援している。外出に消極的な利用者も外出へ向けて意欲がわくように、日々のケアの中で関わりをもち実現に向け支援している。外出を実現させる中で職員は、利用者の本当に行きたい場所や思いを知ることができている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者が自分の思いによってお金を使うことができるように、それぞれの能力に応じた支援を行っている。また、Cafe Olympiaや、移動パン店、地域の商店や祭りへの外出など、お金を使う機会も積極的に提供している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が家族や友人に気軽に電話をしたり、季節の手紙やハガキをやりとりしたりできるように、支援をしている。絵手紙に挑戦したり、海外で暮らす家族に手紙を送ったりと、その取り組みは広がりを見せている。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	オリμπア兵庫は人間科学の観点からの研究に基づいて設計されており、利用者の居心地のよさへの配慮が徹底されている。また、各ユニットをひとつの「家」として捉え、それぞれの利用者・スタッフの望む生活感や季節感を取り入れるようにしている。	施設の玄関にベンチ椅子を置き、利用者・家族や外来者が馴染みやすい空間になっている。3階にあるグループホームの玄関には観葉植物や季節感のある装飾が家庭的な雰囲気を感じさせている。共用空間の壁面は落ち着いた装飾が施されゆったりと過ごすことができる。利用者は目的に応じて置かれたソファ・椅子で、一人でゆっくりと過ごしたり、複数の利用者が自由におしゃべりが出来る居場所が作られている。	

自己 者 第三	項目	自己評価	外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ひとりで座れる椅子、2人で落ち着けるソファ、3人で話ができるテーブルセットなど、オリμπア兵庫ではたくさんの居場所を提供している。また、「死角」も積極的に活用し、安心して過ごすことのできる居場所づくりに取り組んでいる。		
54	(24) ○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	「その人らしさが伝わる部屋」を目標に、使い慣れた家具、思い出の写真や品々、そして好きな物に囲まれた居室づくりを、利用者ひとりひとりの思いにあわせて行っている。家族の協力も大きな力となっている。	ご家族の協力を得ながら、利用者のなじみの品や思い出のものが持ち込まれ、また、家族の写真や手作りの作品などを飾り、それぞれの居室が「自分の部屋」として、個性豊かな安心して過せる部屋となっている。	
55	○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	オリμπア兵庫では、手すりを限定された場所にのみ設置したり、不必要なサインは設置しないなど、安全に配慮した上でできるだけ自立した生活を送ることができるよう工夫をしている。		